

漫画と読書

法学部助教授 梅 本 剛 正

学生時代にイタリアを電車で旅行したときのこと。『地球の歩き方』を開いて、その日に泊まる宿を探していたところ、近くに座っていたイタリア人学生が、本を指差して、「manga?」と聞いてきた。漫画なら是非読ませて欲しいということのようであった。これは旅行のガイドブックだ、と説明すると、彼は残念そうに、日本の漫画がいかに素晴らしいかを語った。いまさら言うまでもないことだが、日本の漫画はすでに世界的に高い評価を受けている。

実をいうと、私は子供の頃から、漫画家になりたかった。いまでも才能さえあれば、転職したいくらいだが、悲しいことに法律研究者の才能しか与えられなかった（笑）。

最近は専門書以外には、ほとんど読書らしい読書をしていない。唯一の例外が、漫画である。私の研究室の一角にはマンガコーナーがあるが、ここの蔵書はドンドン増えている（誤解なきよう付言すると当然漫画は私費購入）。

こう書くと、「漫画のどこが読書なのだ」と叱られるかもしれない。しかし、岩波文庫と漫画とで読書の性質に、なにか違いがあるのだろうか？漫画にも、内容的に素晴らしいものが沢山あるし、岩波文庫にも駄作がある。読書に高級もへったくれない、というのが私の持論である。どんな立派な思想・哲学であっても、読み手がいなければ、意味が無い。そもそも、内容が「立派」かどうかを、いったい誰が決めるのか。岩波文庫は立派で、漫画は低級という発想をするのは、権威に弱いだけで、実際に原著は読んだことはない、あるいは内容をちゃんと批判的に読むことのできない手合いに、多いようだ。

もっとも、こういう議論はあまり意味がないのかもしれない。出版物にせよ映画にせよ、今日の社会では良くも悪くも商業ベースに乗る必要があるので、ウケなければ淘汰されるまでのことである。売れない小説ばかり出す出版社、客の入らない映画ばかり作る映画会社は倒産し、同時にコンテンツも提供されなくなる。長期的にみるなら、独り善がりの教養主義が生き残る余地はない。

もちろん、大衆受けするものが良いものだとはいわない。テレビ番組などをみると、そう思う。NHKの番組には、内容的には優れているが、視聴率があまりとれず（スポンサーがつかず）民放では提供されないものが少なくないように思われる。「思想の自由市場」に委ねていれば、最適なコンテンツが生き残ると考えるのは、やや楽観にすぎよう。しかし、エライ先生が文化の優劣を決めるというのも、逆の意味でおかしな話である。

やや文脈は異なるが、大学教育のコンテンツを考える場合も類似した問題がある。とくに、法科大学院の創設により、学部教育の意義が根本的に問われている、法学部については、現実の問題となっている。従来学部で行われてきた法律学の専門教育が、法科大学院でなされるようになるなら、法学部では一体なにを教えればよいのか？

このコンテンツの決定においても、「大学教育たるもの岩波文庫的教養が必須である」との議論が出てくるのは、容易に想像できる。しかし、エライ政治学者や法律学者の名前を知っていても、マトモな文章ひとつ書けないようで、大学教育を受けたといえるのか？最低、論理的な文章を書ける教育が必要なのは当然ではなからうか。また、社会科学を学

んだという以上は、サビニーや川島武宜など知らなくてもいいから、新聞を読んで、郵政三事業の民営化やペイオフ制度の意味を理解できる方が、重要なのではないだろうか。

話を戻そう。読書に高級もなにもない、という議論の帰結は、図書館に漫画を置いてもいいのではないか、ということになる。一般に図書館というところには、漫画は置かれていない。本学も同様である。もし大学図書館に漫画コーナーを設けて、そこだけ賑わうことになったりすると、大学の品格にも関わるので、具合が悪かろう。しかし、多くの学生が本を読むために集まる場、というのが大学図書館本来の目的であれば、学生の関心の高い読み物を揃えるのは、あながち趣旨に反することともいえないように思える。もっとも、図書館に漫画が置かれた場合の最大の受益者が、私自身であることからすると、この主張に説得力がないことは認めざるをえない。